

# 折口学における五月の節供と 成年戒の関わりについて

李 真

## 論文要旨

折口<sup>おりくち</sup>信夫<sup>のぶ</sup>は年中行事に強い関心を持ち、それに関する論考を数多く発表した。「民俗<sup>みんぞく</sup>学<sup>がく</sup>上よりみた五月<sup>ごがつ</sup>の節供<sup>のせつく</sup>」は、五月初め頃に行われた近代の習俗を古代の「成年戒<sup>せいねんかい</sup>」の習俗と結びつけ、それはいかなるものかを解明し、端午習俗における信仰内容及び行事の変遷を論述した代表作の一つである。子ども<sup>こども</sup>の成長<sup>のせいちよう</sup>を祈願する端午習俗を「成年戒」の名残として捉え、端午習俗の由来や変遷を解釈している。しかし、端午の節供研究において、折口説についてあまり論及されていない。そこで、本稿は、年中行事における折口の論理のもとで、端午の節供が「成年戒」に関係する部分が大きいう折口の指摘に注目しながら、成年戒と端午の節供に関する折口の考え方の特徴を検討することを目的とする。「成年戒」に関する折口の研究の整理を行うとともに、五月の節句に関する柳田国男の所説との比較を踏まえ、成年戒要素を有する中国の端午習俗の事例を取り上げ、折口説の有効性を検証する。

Shinobu Orikuchi had a strong interest in annual events and published many essays on the subject. "The Japanese Boys' Festival from a Folklore Perspective" is one of his representative works that links modern customs performed around the beginning of May with the ancient customs of the "Coming of Age Precepts," elucidates what they are, and discusses the changes in the beliefs and events in the Japanese Boys' Festival. He interprets the origin and changes in the Japanese Boys' Festival, regarding the Japanese Boys' Festival as a vestige of the "Coming of Age Precepts." However, Orikuchi's theory has not been discussed much in research on the Japanese Boys' Festival. Therefore, the purpose of this paper is to examine the characteristics of Orikuchi's thinking on the Coming of Age Precepts and the Japanese Boys' Festival, based on Orikuchi's logic in annual events, and to focus on Orikuchi's point that the Japanese Boys' Festival is largely related to the "Coming of Age Precepts." This paper summarizes Orikuchi's research on the "coming-of-age precepts," and compares them with Kunio Yanagita's theory on the Japanese Boys' Festival. It also examines the validity of Orikuchi's theory by taking up the example

of the Chinese Dragon Boat Festival, which contain elements of coming-of-age precepts.

キーワード：折口信夫、民俗学、五月の節供、成年戒、子どもの成長

## 序

日本の民俗学者、国文学者の折口信夫は独自の学問体系「折口学」を構築した。彼自身の研究論著及びそれをめぐる研究成果が数多く発表されている。しかし、海外において、折口の研究はあまり知られていない。この現状に対し、最近、折口の理論を紹介する論文も外国語に訳され、海外で発表されている。たとえば、島村（2023）は「折口の文化理論は、日本文化に限定されることなく、広く人類の文化を考える上でも有効である」、「グローバルな文脈で、折口の学問が吟味される」という問題意識のもと、「霊」をめぐる理論をとりあげ、その理論の特徴やそこに見られる折口思想の特徴について論じた<sup>1</sup>。

折口信夫は年中行事に強い関心を持ち、昭和初期から年中行事に関する論考を発表した。たとえば、昭和5・7年に年中行事をめぐって論考「年中行事－民間行事伝承の研究－」（以下「年中行事」と略記）を発表した。この論考は、昭和4年十月に長野県東筑摩郡東部教育会での講演が小池元男氏によって筆録されたものである。『民俗学』第二巻第八・十号、第四巻第六一九号に、同題で六回に亘って発表されたものを初出とする<sup>2</sup>。年中行事に関する研究としては、柳田國男の「民間暦小考」とほぼ同じ頃発表されたことが分かる。

年中行事における折口の研究について、以下のように評価されている（田中，1992）。

年中行事の研究を個別行事の分析もしくは単なる行事史にとどまらせず、年間の行事すべてを念頭に置きつつ、年中行事の本質、行事相互の関係、年間の行事構成の原理にまで説きおよぼうとした最初の本格的研究と言えよう。<sup>3</sup>

このように、年中行事を論じる際に、折口の論考に関する検討は不可欠であるといえよう。

年中行事の全体像を論じる「年中行事」のほか、個別行事を分析する論考も数多く発表された。たとえば、「正月の儀式」「年中行事に見えた古代生活—雛祭りを中心に—」「七夕祭りの話」のような文章がある。その中で、端午の節供と関わりのある論考に下記のようなものがある。

「年中行事－民間行事伝承の研究－」（二、神迎へ同じく神送り）

「端午と男女の節供」、初出：『都新聞』（昭和七年五月四日付）

「民俗学上よりみた五月の節供」、初出：昭和八年五月『歴史公論』第二巻第五号

上述の論考の中で、「民俗学上よりみた五月の節供」は「端午の節供」をテーマとして取り上げられた最も詳細な文章である。本稿は、年中行事における折口の論理のもとで、「成年戒」と端午の節供との関わりという折口の指摘に注目しながら、「民俗学上よりみた五月の節供」をどのようにとらえるかを検討することを目的とする。その講読によって、成年戒と年中行事の関連付け、殊に端午の節供に関する折口の考え方の特徴を論じる。

## 一、年中行事における折口の論理

日本の年中行事において、折口はどのような考え方を持っていたか。本章では、その考え方について、以下のような三点で述べていく。

まず、折口は、ひとつ行事の「繰り返し」を日本の年中行事の根本の論理として提出した<sup>4</sup>。たとえば、「正月・小正月・上巳・節供・春祭り・端午・田植祭・乞巧奠・棚機・盂蘭盆・秋祭り・神嘗・新嘗」をすべて神迎えの式とされ、皆みそぎと関係があるとされた。

そして、季節の行き合いに関する古代の人々の信仰やそれとみそぎの関係にふれ、

古代に於ける人の頭には、をりふしの移り変り目は、守り神の目が弛んで、害物のつけ込むに都合のいい時であるとの考へがあつた。それ故、季節の推移する毎に、様々な工夫を以て悪魔を払うた。五節供は即此である。<sup>5</sup>

と季節の変わり目に五節供が設定される理由を論じた。季節の変わり目に、「害物」がつけ込みやすいと古代人は信じていたので、それを避けようとみそぎを行ったのであるとされたのである。

最後に、折口は、年中行事の伝来と受容について、

外来の風習を輸入するには、必在来のある傾向を契機としてゐるので、此がかけてゐる場合には、其風習は中絶すべき宿命を持つてゐるのである。だから力強い無意識的の模倣をする様になつた根柢には、必一種国民の習癖に投合する事実があるのである。<sup>6</sup>

と述べ、「在来のある傾向」や「国民の習癖」を強調し、日本固有の古代信仰を年中行事の定着における決定的な要因としている。例えば、五節供について、「皆季節の替り目に乗じて人を犯す悪気のあるのを避ける為のもので、元は支那の民間伝承であつたと共に、同じ思想は、日本にもあつた」と論述した。

具体的に端午の節供について、「年中行事」「民俗学上よりみた五月の節供」を除き、ほかの論考においても論じられている。主に「古代民謡の研究」、「古代生活の研究」、「盆踊りと祭屋台と」、「偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道」等にその内容が見られる。折口

はこれらの論考において、「五月の人形」や「五月幟」の類、「女の家」といった五月の田植時の信仰を詳しく論じ、「成年戒」と関連付けながら、この季節に「神を迎へ、神送りをした風習」があったと結論づけた。

## 二、「民俗学上よりみた五月の節供」について

本章では、「民俗学上よりみた五月の節供」の発表情報や内容について整理していく。

「民俗学上よりみた五月の節供」<sup>8</sup>の初出は『歴史公論』第二巻第五号（昭和八年五月発行）である。この論文の中において、屈原の伝説等によって、中国の端午節を「水に棲む怨霊－水辺の神－の祟りを恐れて慰めるための行事」としてとらえ、また、「印字打ち」の行事や「あやめ鬘」に注目し、「支那伝承による端午の習俗と一口に言へば、五月初め頃行はれて来た日本民俗－成男戒の行事－とが、習合してゐる」と考え、「成男戒授受の日と端午とは、深い関係にある」と推察した。オリジナルな点は端午の節供と成年戒<sup>9</sup>との関わりを論じた折口の仮説であろう。論考の最後において、五月の節供はいったいどのような節供であるかを以下のように、

その形式に於ては、凡そ支那的要素であるが、その信仰内容に於ては、濃厚に日本的要素が認められる。こゝに、支那的要素と日本的要素との区別に、幾分見当がつけられるのであつて、日本的要素を検出する事に依り、五月の節供は成男戒から説明できるが、寧ろ成男戒を中心としてゐる節供だ、と推考してよいと思ふ。<sup>10</sup>

と述べ、論述を締めくくった。五月の節供に行われる行事は、その信仰内容において日本固有の要素が認められ、成年戒に関係する部分が大きいと推考された。

折口は五月初め頃に行われた近代の習俗を古代の「成年戒」の習俗と結びつけ、それはいかなるものかを解明し、端午習俗における信仰内容及び行事の変遷を論述した。論考は主に「印地打ちと成年戒」「あやめ鬘」「葉狩り」の三つの部分から成る。ここで、それぞれの部分において、「成年戒」との関わり方を整理し、端午の節供に関する折口のとらえ方をみていく。

### （1）印地打ちと成年戒

「印地打ちと成年戒」の部分では、折口は成年戒と端午と関わりのあることを明確に主張した。まず、折口は屈原伝説を取り上げ、中国の端午習俗の民俗的意義について、下記のように述べ、

支那では、屈原が汨羅に投身したので、彼を弔つたことが、抑、端午の節供と言ふ行事の起源だと伝へてゐる。（一説に、或は伍子胥、或は勾踐を祀る日とも伝へてゐる。）

之を要するに、水に棲む怨霊－水辺の神－の祟りを恐れて慰めるための行事で、恐らくは、南方支那の、水辺に起源を有するものに相違ない。かうした水辺に關聯してゐるのが、端午の節供に就ての支那的な意味である。<sup>11</sup>

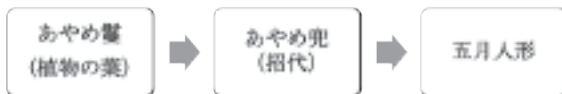
中国の端午習俗を「水に棲む怨霊の祟りを恐れて慰める為」の行事としてとらえたことが分かる。

それに対して、日本において、「水辺」より「もっと外の意味」があることを述べ、「成年戒授受の日」と端午との深い関係を主張した。そこで、「印地打ち」や「女の家」の事例を示して成年戒と端午との関係を説明していた。「印地打ち」について、「成男戒を受ける若い男を小石（河原に多いものである。）の中に埋める儀式」、「成男戒を受ける日の石打ちの神事」だと定義した。「女の家」について、男の人が皆出払うのを「物忌み生活のため一个所に籠もつてゐることを意味する」、「成男戒をうける日」と論述した。

## (2) あやめ鬘

折口はあやめ鬘を「成男戒授受のしるし」とみなし、「神を招き降す招代が、その植物の葉から人形に変じた如く、招代として立てた馬印に似たあやめ冴が、人形に化したのであつて、此点五月人形の発生に就て、説明出来る」とあやめ鬘から五月人形への変遷過程（図Ⅰ参照）を論じた。しかも、「雛人形とは違つて、五月人形は形代から発達したものでなく、招代から発達した人形である事」<sup>12</sup>を特に説明を付け加えた。いわば「依代」の理

図Ⅰ 五月人形の発生過程



論を用いて五月人形の発生過程を論じた。宮中の「あやめ輿」も「あやめによつて神（恐らく水辺の神）を宮中に誘ひ込んで、祭ることになつてゐた。（中略）或いは五月鯉もさうした形式に類似せる物の様に思ふ」と論じつづけ、「髯籠の話」の中で論述された「依代」「招代」の理論と一致している。つまり、端午の幟の頭につけた髯籠、端午の節供の鯉幟り、屋根の上にあげる菖蒲は皆「招代」の事例であると主張したのである。

また、この「あやめ鬘」は、折口によれば、「成男戒授受のしるし」であり、物忌み生活の期間中におけるタブーを示すとも述べた。つまり、物忌み生活や印地打ちは成年戒を受ける際に耐えなければならぬ試練であるといえよう。

## (3) 葉狩り

最後に、葉狩りの古俗についても、やはり「成男戒に成就するかどうかを占う」一種の卜占と推測した。夏至の一候「鹿角解」（鹿の角が脱落すること）をみて若返るもの甦生

するものと感じた古代人の信仰が潜んでいたと説明し、五月初夏に行われる薬獵り、特に鹿を薬として食う古俗を成年戒に関連づけさせたのである。

総じていえば、「みそぎ」や「成年戒」などの名彙を用いて端午の節供の行事内容及び変遷過程を解明しようとした折口の考え方が読み取れる。とりわけ、石の洗礼（印地打ち）と成年戒と、招代（五月人形、五月の幟の類）とみそぎとの関係をめぐって論述を展開させていた。周知の如く、「成年戒」は折口の論考の中において非常に重要視され、日本文化を論じる際によく言及される重要な存在である。他の論考を参照しながら、折口の年中行事に関する見解をもとに、「成年戒」という術語の全体像をふまえながら、「民俗学上よりみた五月の節供」等の論文を通し、「端午の節供と成年戒」をめぐってさらに深く考察していきたい。

### 三、端午の節供に関する折口の仮説—成年戒との関わり

前述の論考を合せてみれば、折口は端午の節供と成年戒の関わりを強く主張していたことが分かる。本章では、まず、成年戒に関する折口学の術語の全体像を把握するうえで、成年戒と石の洗礼を取り上げて考察したい。

#### （1）折口学における術語「成年戒」について

それでは、折口はなぜ五月の節供を成年戒に関連付けたのか。その理由を明らかにするために、折口の「成年戒」の全体像を把握する必要がある。これまで、折口の「成年戒」は独自の学術用語として整理されてきた。例をあげると、「折口名彙解説」（『折口信夫事典 増補版』）、「成年戒・成年式」（『折口学における術語形成と理論 8』）などがある。しかし、端午の節供と成年戒との関係についてさらに研究する余地があると思われる。

折口は「成年戒」について以下の論考で取り上げた（下表を参照）。大正時代から昭和時代にわたるが、昭和初期を中心に論じられていたことが分かる。特に「古代民謡の研究」などの論考で、五月初め頃に行われる成年戒について詳しく論じ初められたとされている<sup>13</sup>。

論考	初出	所収
「琉球の宗教」	大正12年5月「世界聖典外纂」	全集2
「古代生活の研究」	大正14年4月「改造」第七巻第四号	全集2
「鬼の話」	大正15年、三田史学会例会講演筆記	全集3
「万葉集の解題」	大正15年5月、万葉集十回講座講演	全集1
「ほうとす話」	昭和2年6月頃草稿	全集2



「水の女」	昭和2年9月、3年1月「民族」第二卷第六号、第三卷第二号	全集2
「古代民謡の研究」	昭和2年9・12月「日光」第五卷第一・二号	全集1
「国文学の発生」(第三稿)	昭和2年10月稿、昭和4年1月「民族」第四卷第二号	全集1
「国文学の発生」(第四稿)	昭和2年1・2・11月「日本文学講座」第三、四、十二卷	全集1
「万葉集研究」	昭和3年9月「日本文学講座」第十九卷	全集1
「大嘗祭の本義」	昭和3年講演筆記	全集3
「翁の発生」	昭和3年1月・3月「民俗芸術」第一卷第一・三号	全集2
「花の話」	昭和3年6月、國學院大學郷土研究会例会講演筆記	全集2
「靈魂の話」	郷土研究会講演筆記。昭和4年9月「民俗学」第一卷第三号	全集3
「組踊り以前」	昭和4年8月「民俗芸術」第二卷第八号	全集3
「年中行事—民間行事伝承の研究—」	昭和5年8・10、7年6-9月「民俗学」第二卷第八・十号、第四卷第六-九号	全集17
「郷土と神社および郷土文芸」	昭和7年	旧全集ノート篇6
「根子の番楽・金砂の田楽」	昭和10年11・12月「日本民俗」第四・五号	全集21
「日本女性史に於ける明治時代の意義」	昭和17年1月「女性生活」第七卷第一号	全集19
「神道宗教化の意義」	昭和21年8月21日、関東地区神職講習会講演筆記	全集20
「民族史観における他界観念」	昭和27年10月「古典の新研究」第一輯、角川書店	全集20

折口の「成年戒」の術語について、『日本民俗大辞典』上の「成年式」の解釈<sup>14</sup>と対照すれば分かるように、通過儀礼として、もの忌みの禁欲生活や激しい試練など成人になるための条件や、成年式を済ませた後で獲得する一神事に参加する資格や結婚など一資格の点で共通している。折口の「成年戒」の術語の独自性としては、「二段階成年戒論」<sup>15</sup>のほか、神（まれびと）が訪れる特定の時期、いわゆる年中行事（祭り）との関連づけの点に見られる。殊に五月雨の時期の信仰生活をもとに、五月の節供に行われる成年戒のもの忌みを

強調していた。五月の節供と成年戒の関連づけを論じる際に、先島諸島の事例や石こづみなどの石信仰が取り上げられたのも、折口の成年戒の特徴であるといえよう。

実は、五月の節供と成年戒について、「民俗学上よりみた五月の節供」より前にすでに「古代民謡の研究」で詳しく論じられたことが分かる。「古代民謡の研究」<sup>16</sup>では、日本の端午の節供の本質や成年戒との関連付けについて、

端午の節の斎戒は、男が守らねばならなかつた為、男の節供として、人形<sup>ヒトガタ</sup>を据ゑて穢邪を移し、又ゆきあひまつり（交叉期の祭り）の考へから出た邪鬼一夜行神の恐れが転じて一の来襲を防ぐ備へをする日になつた。併し、五月幟の類は、一つは田植系に來訪する神を迎へる招ぎ代<sup>ヲ シロ</sup>なる青山（標の山の類）の変化でもあり、又神人たるべき若者の、神意によつて、指された住む家の目あてになるものらしい。つまりは、<sup>イモキ</sup>斎居の宿のしるしから拈つたのである。

我が国では、ある時代から、多く四五月の間を、成年戒・成女戒を村の青年処女に授ける時期とする様になつたらしい。成年戒を授かつた後の男子は、忌み日として外に集つて居籠るのではなく、神人の一人として、群行神の一人に扮して、女の家を訪れて行く資格を得るのである。（457頁）

と述べられた。上記の引用文の如く、成年戒の行われる期間は多く四、五月とされ、成年戒授受の本質は「神となれる神聖なる神格を受けた」ことにあると論述された。更に、成年戒の行われる日取りについて、

成年戒授与の儀は、元、初春に行はれたらしいが、後には、色々の日どりを、村々で定めたらしい。その中で、節分の夜に行はれた形式が、殊に著しい。だが、四月・五月の頃、田植系前に授戒して、<sup>ナガメイ</sup>長雨斎みを経た後、田遊びや、<sup>サ ヨ</sup>五月夜の遊行に出させたらしいのである。（460頁）

と論じ続け、「雨づゝみ」「長雨斎み」の語義の解釈のみではなく、田遊びという実在の民俗事象に基づいて推測が行われた。

また、山籠りの受戒期間中つけた「花藪」を「神人となつたしるし」且つ「一般成年男子の神事奉仕の際の斎みのしるし」とした。この「花藪」は、「支那伝承の端午の信仰と合体して、菖蒲鉢巻が、少年の頭に纏はれる風を生じた」と「菖蒲鉢巻」の習俗の由来を推測した。中国の端午習俗における菖蒲習俗との習合が主張されたことが分かる。

その他、同論文の中で、

男のも、恐らく此前後に行はれ、授戒の済んだ者は、やはり山ごもりを長く続けさせられたものと思ふ。此が、<sup>かほ</sup>貌つきを替へて、大峰山上でする御嶽精進にもなつた。此は、平安中期にも既に見えた事だ。とりわけ、<sup>シンダチ</sup>新達など俗に謂ふ初登山の若者は、先



達から苦しめられた。

石を堆んで人を埋めた石こつみの話、謡曲に残る谷行の作法などは、成年戒の苦しみの物語化したものである。天狗がまた勝を裂くといふ信仰も、此に関係がある様だ。(460頁)

と成年戒と御嶽精進との関係についても論述した。

「成年戒」に関する他の論考を読めば分かるように、先島諸島の事例、「まれびと」論との関わり、成年戒受戒の試練などの内容も論述されていた。それぞれ下記のように例をとりあげて説明する。

①先島諸島の事例について：

先島諸島の例を見ると、成年授戒の日と祝福とは、おなじ日の同じ行事の中に含まれてゐる。八重山離島をはじめとして、其風俗を移した石垣島の二三个村の「あかまた・くろまた（又、あをまた）」の所作を見ても知れる。遠来の神の居る間に、新しく神役一寧、神に扮<sup>ナ</sup>る一を勤める様になつた未授戒の成年に戒を授けて、童<sup>ワラベ</sup>の境涯から脱せしめる神秘を、行うて置くのであつた。<sup>17</sup>

②「まれびと」論との関わりについて：

此洞からに<sup>ナ</sup>いるびと（にらい人）又はあかまた・くろまたと言ふ二体の鬼の様な巨人が出て、酉年毎に成年式を行はせることになつてゐる。青年たちは神と言ふ信念から、其命ずる儘に苦行をする。<sup>18</sup>

吉事祓へは、畢竟たぶうの内的表現で、外的には、<sup>かづら</sup>縵・忌み衣などを以て、しるしとした。季節のゆきあひ毎に祓除を行ふと、もに、その附帯条件たるまれびとのおとづれを忘れなかつた。<sup>19</sup>

田植系祭りに臨むさつきの神々なども迎へられ、季節々々の<sup>ユキアヒ</sup>交叉期祭りには邪気退散の呪法を授けるか、受けるか訣らぬ鬼神も来る様になりました。さうしたまれに而も、頻々とおとづれるまれびと神も、元は年の交叉点に限つて姿を現したものでした。此等の常世人の、村の若者に成年戒を授ける役をうけ持つてゐた痕が、ありありと見えてゐます。<sup>20</sup>

③成年戒受戒の試練について：

禪定・精進は、山籠りの物忌みで、成年授戒・神人資格享受の前提です。

御嶽精進を経て、始めて男となると言ふ信仰は、近代に始まつた事ではない様で、山地に居させ、禁欲・苦役の後、成年戒を授けた昔の村里の規約が、形を変えて這入つて来てゐます。<sup>21</sup>

男の場合でいうと、子供から本当の男になる場合に、禁欲生活をする。それと同時に

非常な鍛錬を科せられて、それに耐えることができれば初めて男になる。男になるということはなんだというと、神に仕える人としての、資格ができないことだ。だから当然祭りの前に行なう。新しく大きな祭りを行なう前に非常な苦しみと非常な禁欲生活をして祭りのときに神になつて出る。神になる資格ができたかできないかということが、成年式の存在するゆえんなのである。成年式を受けないものは神になれない。<sup>22</sup> これらを整理すると、五月の節供と成年戒との関係について、折口の見解を以下のようにまとめることができる。

ア、五月の節供は季節の変わり目に行われる行事であり、田植の行事とも関わっている。まれびとの訪れる時節でもある。

イ、季節の変わり目に、邪鬼がよく来襲してくると古代の人々が信仰していた。この信仰は、外来の信仰と共通している。

ウ、邪気退散や田植の行事に訪れて来る神を迎える、或は神に仕える神聖な神格（神になる資格）を得るために、みそぎをすることは前提となり、成年戒受戒（禁欲や苦行）を経なければならない。

エ、子どもの成長を祈願したりすることを成年戒の名残としてとらえている。

## (2) 柳田説との比較

上述の如く、昭和五年から七年にかけて折口の「年中行事—民間行事伝承の研究」が、昭和六年に柳田国男の「民間暦小考」が発表されたのである。本章では、折口と柳田のこの二つの論文を中心に、年中行事、特に五月の節供における折口の理論と柳田の理論を対照してみたい。

「民間暦小考」も個別の年中行事を論じるものではなく、日本の年中行事の本質や構成の論理を論述した文章である。この点、折口の「年中行事—民間行事伝承の研究」と同様である。柳田は、「民間暦小考」では、暦の普及する前の年中行事の様子を見ようとし、また、月の変化を重要視し、年中行事が望の日や上弦、下弦の日に集中することを証明しようとした。

五月の節供について、柳田は、

すなわちこれ（筆者注：三月と五月の二節供）も初春の新年に対する事始め事納めと同じく、四月望の日の「新年」の前後の区切りとして、昔から重要視せられた折り目の日であったのを、後に三日五日に移して、新しい暦との折合を付けたのではなかったろうか。<sup>23</sup>

と述べ、農事が始まる前の四月の満月は重要な境目の一つとして、その前後に行われるていたと思われる三月と五月の節供も重要視されたと力説しようとした。

そして、柳田も五月の節供の「印地打ち」に注目した。折口説と異なり、「四月十五日が昔の年越だろうか」という「想像」の証拠の一つとして、印地打ちの例を取り上げた。印地打ちと五月の節供との関わりについて、柳田は以下のように論述した。

これ（筆者注：少年の石合戦、俗に印地打ちと呼ばれた遊戯）は正月の浜弓毬杖、三月の鶏合せ、五月の競馬、七月の相撲綱曳などと共に、いずれも本来は二つの群が神の恵の厚薄を卜せんとした年占の方法であったゆえに、それが童戯と化して後もなお久しく支持せられていたので、現に朝鮮はつい近頃まで、石戦は正月上元の一種の行事であった。（中略）五月端午の節供がもし支那暦の感化に負う所ありとすれば、かえってこの類の日本独特の遊戯がその日に結び付いていることを奇としなければならぬ。<sup>24</sup> 印地打ちを年占の方法としたことが分かる。折口も柳田も印地打ちを日本独特の行事とみなしたが、印地打ちが五月の節供に結び付く原因について、柳田は言及しなかった。

折口は「民俗学上よりみた五月の節供」では、「印地打ち」について、「成男戒を受ける若い男を小石（河原に多いものである。）の中に埋める儀式」、「成男戒を受ける日の石打ちの神事」だと定義し、印地打ちを成年戒の儀式としてみなしていることが分かる。しかし、『日本民俗大辞典』の「石合戦」の条では、

互いに相対して石を投げ合う遊び。印地打ちと記されることもある。印地は石打ちの訛りというが明確ではない。戦いの折に飛礫を用いた例は『吾妻鏡』にもみえ、古くからの武器の一つであった。それが年中行事の中にとりいれられ、端午節供の行事として行われたが、たびたび事件を起した。その後江戸幕府は一六三四年（寛永十一）には禁令を発し印地打ちを禁じた。しかし全く石合戦の行事が行われなくなったわけではない。（中略）こうして全国的に石合戦の行事が行われていたが、それは端午節供の行事として行われていただけではない。（中略）豊凶の占いとしての信仰に裏付けられたものであった。<sup>25</sup>

と解釈されている。前後両者の相違が明らかである。通説によれば、「印地打ち」は「石合戦」とも呼ばれ、石を投げ合い勝ち負けを競う遊びであり、古くは吉凶を占う行事であった。端午の節供だけではなく、小正月などほかの年中行事に際しても行われた。全国の印地打ちの事例の中で、川を挟んで行われる例が多く見られ、そして、ほとんど少年や青年によって行われたことが分かる。

印地打ち（石合戦）は呼び名がさまざまであるが、東アジアにおいて広く行われていた石に関する習俗である。行われる時期は、端午の節供やお正月に集中されていた。中国の劉曉峰は、中国古代の陰陽五行の思想やフレイザー『金枝篇』の類感呪術と感染呪術の理論を用いて石合戦の行われる理由を解釈した<sup>26</sup>。石は中国において古くから「陰中之陽、

陽中之陰」<sup>27</sup>の物質だと信じられていたため、石に関する習俗が生れたのだと論述されている。そして、端午は季節の変わり目であるため、陰と陽の争う時期だと認識されている。その陰と陽の争う状態を模擬して石合戦を行い、五穀豊穡や子孫繁栄を祈願したと劉は論じた。

日本における成年式の形態はきわめて多様であるが、「成年戒」の儀式をめぐる、「印地打ち」との関係に関する折口の論述に特に注意してほしい。折口は、「漂著石神論計画」（昭和4年7月「民俗学」第一巻第一号）で「16 石と、成年戒と」「17 印地打ちと、成年戒と、石の洗礼と」の二項目を示した。成年戒と石に関する習俗の関わりにおいて、折口は石こづみの習俗を例に取り上げ、これを成年戒の儀式、試練の一つとみなしていた。石こづみの習俗について、

此は、山伏生活の中にそんな式（石こづみ：筆者注）があつたのだと思ひます。其も単純に、山伏の私刑であつたなど、考へてはなりません。魂を身に著ける、復活の儀式として行はれたのが最初の様です。（中略）要するに、真床襲衾に於けると同じ様に、ものゝ中に這入つて、完全に魂の身にくつつく時期を待つたのですが、石の中には這入れぬので、石を積んで其中に這入つたのだと思ひます。<sup>29</sup>

と論じ、「物の中に入る儀式」「魂を身に著ける、復活の儀式」と考えていたことが分かる。折口はこのような石の洗礼を物忌み生活の苦行としてみなし、成年戒の儀式の一つであろうと推考した。

折口は、石こづみの習俗のほか、賽の河原の信仰の事例も取り上げている。賽の河原の信仰は、昔村々の河原で行われた成年式の儀式によって生じたと折口は論述した<sup>30</sup>。この儀式はきわめて残酷なものであったとされていた。

上述からみれば、折口は儀式の行われる人物、場所や目的によって印地打ちを成年戒と関連付けさせたのではないかと思われる。つまり、印地打ちや石こづみはいずれもよく河原で行われた。その裏に、甦生、生れ変るといった信仰が潜んでいる。この点において、折口の推論は独自性のあるものだといえよう。

#### 四、中国の端午習俗「龍船競漕」にみる成年戒の要素

これまで述べてきたように、日本の五月の節供について、成年戒の要素が含まれるのは、折口によって指摘された。子どもの成長を祈願する端午習俗を「成年戒」の名残として捉え、端午習俗の由来や変遷を解釈していた。つまり、子どもに何かをやらせて無事成長を願ったりするということに端午節の特徴であると考えられている。例えば、子どもを中心

に行われる印地打ちや綱引などの競技、朝露に濡れた草を裸足で踏み無病息災を願う「露踏み」のような事例は挙げられる。本章では、中国の子どもの端午習俗においても、折口のこの説は通用することを検証してみたい。

中国において、古くから旧暦の五月を「日長至、陰陽争、死生分」(『禮記・月令』)の極めて「危険」な時期、忌み事が多い季節だと認識されてきた。歳時書や地方志によれば、様々な邪気祓いの習俗が記載されている。その中で、子どもの無病息災を祈願する端午習俗は現在に至っても各地域で継承されている。『中国地方志民俗資料彙編』<sup>31</sup>によれば、子どもの端午習俗は大きく以下の三つの類型(合計十三事例)に分けられる。

(一) 行事食(以下の習俗の日本語訳:筆者)

- A. 子どもの目をもぐさであぶる。その後、ちまきなどを食べさせる。(四川省・渠県)
- B. 端午の朝、ゆでた卵を子どものお腹の上に置き、数回転がしてから食べさせる。  
そうすると、災いを避け、腹痛にならない。(河南省)
- C. 端午の夕方になると、菖蒲の根やにんにくを搗き、雄黄とともに酒に浸し、老若問わず少量飲む。(広西省・来賓)

(二) 衣服、飾り物など

雄黄朱砂、植物、呪符、各種香囊と呼ばれる匂い袋や長命縷などの装飾品は端午に最も広く継承されている邪気祓いの習俗である。例えば、以下のような習俗が見られる。

- D. 雄黄酒で子どもの額に「王」の字を書いたり、朱砂を額やお腹に塗ったりして邪気を避け、疫病を防ぐと言われている。
- E. 五毒衣(サソリ、ヤモリ、ガマ、ムカデ、ヘビが描かれる服)を子どもに着せ、虎頭帽や虎頭靴も着用させる。
- F. 首や手首、足首には五色の糸をまく。避邪の呪物とされる。
- G. 香囊と呼ばれる匂い袋を子どもの首からぶら下げる習俗がある。魔よけや病気よけの意味が含まれる。

(三) 邪気祓い・病気祓いの習俗・競技(以下の習俗の日本語訳:筆者)

- H. 端午の朝、草の上に溜まっている露を集め、子どもの顔を洗うと、目の病気にならない。(山東省・栄城等)
- I. 遊百病:夕食後、子どもに新しい服を着せ、田畑を回らせる。(貴州・平坝)
- J. 出彩:十三、四歳の子供に華やかな服を着せ、龍舟の先端に立てられる柱に縛りつける。(上海)
- K. 風揚げ、「放殃」(災いを放す意味)(広東・石城)
- L. 「克杖斗石」(印地打ち):端午の朝、一二、三才の男の子は大声を出して戦いを挑み、



午前十時ごろ年上の男の子たちは正式に克杖斗石を行う。(東北地方・宝鞍山)

M. 子どもに色を塗らせた虎の絵を門戸やベッドに貼ると、邪気を避けることができる。

(浙江省・寧波)

上述のように、中国の端午習俗において、子どもが主体で行う習俗が広範囲で数多く伝承されてきたことが分かる。それらの習俗にはすべて無病息災を祈願する意味合いが含まれる。現代中国の端午習俗を代表する「龍船競漕」の事例を取り上げ、そこに潜まれる成年戒の要素について分析を行いたい。

まず、龍船競漕について、以下の二例を付け加えて説明したい。

例一 (『呉県志』による記録)

(龍船) 亭之上、選端好小兒、装扮台閣故事、俗呼「龍頭太子」。尾高丈許、牽綵繩、令小兒水嬉、有(中略)諸戲、謂之「糸鳥梢」。

例二 (『真州風土記』による記録)

有綵繩系短木於龍尾、七八歳小童雙髻、紅衫緑褲、立短木上演其技、(中略)曰「弔梢」。上記の二例とも龍船の中で「童子献技」の場面が描く記録である。つまり、子どもに龍船の中で様々な演目を演じさせ、神様に奉る。事例Jと似たような習俗であることが分かる。子どもたちは、これによって、一年の無病息災を神様に祈願する。年齢層が特定されていたので、成年戒の要素が裏に潜んでいることが読み取れる。また、現在龍船競漕が盛大に行われる広東省において、若人が龍船競漕を受け継ぐことは成人となることを意味するという認識が見られている<sup>32</sup>。

以上のような事例からみれば、ある年齢層のこどもや若者を何かの行事をやらせることによって、子どもの無事成長祈願の目的を果たすと同時に、このような体験を通し、新たな人生の段階に上がっていくという通過儀礼の意味合いも明らかに現れている。折口の五月の節供に関する説は中国の端午習俗にも通用すると言えよう。

## 結び

本稿では、冒頭に折口の年中行事研究、とりわけ五月の端午に関する論考を紹介した。そして、折口の年中行事における基本的な考え方―「繰り返し」の理論や季節の変わり目に五節供が行われる理由―を確認した。

1 呉県：現在の蘇州。

2 真州：現在の揚州・儀征



そして、論考「民俗学上よりみた五月の節供」の内容を「印地打ちと成年戒」「あやめ鬘」「葉狩り」の三つの部分に分けて整理し、端午の節供における折口のとらえ方を把握した。それによって、端午の節供が「成年戒」に関係する部分が大きいと指摘されたことが分かった。「外来の風習を輸入するには、必在来のある傾向を契機としてゐる」という外来文化の受容と定着についての折口独自の理論が基礎となっている。

ついで、成年戒と端午の節供との関わりという折口の仮説をめぐって考察を行った。まず、折口学における術語「成年戒」の全体像を把握し、その内容やそこに見られる折口の見解の特徴を論じた。殊に折口の仮説による端午の節供と成年戒の関わりを明らかにした。そして、折口が取り上げた「印地打ち」（石の洗礼）という事例に注目し、五月の節句に関する柳田国男の所説との比較を踏まえ、成年戒要素を有する中国の「龍船競漕」習俗の事例を取り上げ、特定の年齢層や明確な通過儀礼の認識といった側面から折口説の有効性を検証することができた。

## 注

- 1 島村恭則（2023）「霊魂的贈予 折口信夫の文化理論」『日語学習与研究』224号、6-11頁。中国語に訳された論文である。
- 2 引用は『折口信夫全集17』の解題（451頁）によった。
- 3 田中宣一（1992）「民間年中行事の研究小史」『年中行事の研究』桜楓社、22頁。
- 4 引用は「年中行事－民間行事伝承の研究－」によった。
- 5 折口信夫「盆踊りと祭屋台と」（『折口信夫全集』2、中央公論社、1995、233頁）。
- 6 注5と同様。
- 7 折口信夫「偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道」（『折口信夫全集』3、中央公論社、1995、323頁）。
- 8 折口信夫「民俗学上よりみた五月の節供」（『折口信夫全集』17、中央公論社、1996、235-242頁）。
- 9 注8「民俗学上よりみた五月の節供」の中で、「成男戒」と「成年戒」の両方が使用されている。本文中、引用の部分を除き、ほかはすべて「成年戒」と記す。
- 10 引用は注8「民俗学上よりみた五月の節供」によった。
- 11 注10と同様。
- 12 「年中行事－民間行事伝承の研究－」では、上巳・端午の節供に飾る人形は「形代」とされた。
- 13 西村亨（1998）「田遊び・もの忌み・成年戒」『折口信夫事典 増補版』大修館書店、271頁。
- 14 『日本民俗大辞典』による「成年式」の解釈。「子どもから大人への転換点に行われる通過儀礼。（中略）成年式の時期は、男子では数えの十五歳ごろで、この儀式を経ることによって労働・行政・婚姻の各面で原則的には一人前の村人として認められた。家族や親族のあいだで成年式を行なった直後、

若者組や寝宿へ加入することが多かったと見られるが、なかにはそれら集団への加入式そのものが成年式を意味するものもあった。(中略)以上の成年式はいわば定型的なものであるが、これ以外にも、男子の霊山登拝であるとか、道祖神祭、三河の花祭、対馬の盆踊り、女子の花摘み、盆竈行事、伊勢参り、伊豆諸島の山の神祭、あるいは男女双方の歌垣等々の中には、明らかに成年式としての性格をもつもの、あるいは成年式の要素がうかがえるものがあり…(平山和彦)」

- 15 関口知誠「成年戒・成年式」(『折口学における術語形成と理論』8、折口信夫術語研究会、2014、118-126頁)。
- 16 折口信夫「古代民謡の研究」(『折口信夫全集』1、中央公論社、1995、444-463頁)。
- 17 折口信夫「組踊り以前」(『折口信夫全集』3、中央公論社、1995、344-345頁)。
- 18 折口信夫「古代生活の研究」(『折口信夫全集』2、中央公論社、1995、35頁)。
- 19 折口信夫「国文学の発生(第三稿)」(『折口信夫全集』1、中央公論社、1995、57頁)。
- 20 折口信夫「翁の発生」(『折口信夫全集』2、中央公論社、1995、351頁)。
- 21 注20と同様。368-369頁。
- 22 折口信夫「郷土と神社および郷土芸術」(『折口信夫全集』ノート篇6、中央公論社、1972、343頁)。
- 23 柳田国男「民間暦小考」(『柳田国男選集4 新たなる太陽』、修道社、1972、178頁)。
- 24 注23と同様、176-177頁。
- 25 福田アジオ等(1999)『日本民俗大辞典』上、吉川弘文館、80-81頁。
- 26 劉曉峰「東亜“克杖斗石”考」(『東亜的時間一歳時文化的比較研究』、中華書局、2007、279-294頁)。
- 27 引用は『初学記』によった。東洋医学の用語で、陽中之陰は、陽の中に内在する陰であり、陽を補完するものである。陰陽の調和する状態を表す。
- 28 折口信夫「漂著石神論計画」(『折口信夫全集』3、中央公論社、1995、449頁)。
- 29 折口信夫「山の霜月舞一花祭り解説一」(『折口信夫全集』21、中央公論社、1996、307頁)。
- 30 折口信夫「日本女性史に於ける明治時代の意義」(『折口信夫全集』19、中央公論社、1996、282-283頁)。
- 31 丁世良、趙放『中国地方志民俗資料彙編』、書目文獻出版社、1995。
- 32 傅一波、龍舟季的江門“村超”：上了船就是我们的人、時代財經、2024-06-07、<https://www.tfcaijing.com/article/page/57325933616b776755687939742f62776c6a645557513d3d> (参照2024-11-1)